

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02789

研究課題名（和文）1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査

研究課題名（英文）Research on elaborate historical research on language policy in Japanese

研究代表者

齋藤 達哉（SAITO, Tatsuya）

専修大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：90321546

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、1940-1950年代における日本語の言語政策で重要な役割を果たした、釘本久春と岩淵悦太郎に関して、調査・研究を実施した。彼らが残した資料に基づく調査及び関係者へのインタビューによる調査を行った。岩淵悦太郎に関しては、戦後の国文法教科書編纂の経緯に関する研究を実施した。また、1949年に岩淵が主導した福島県白河市での言語調査について、元被験者を探しあてた（インタビュー調査はCOVID-19の影響で未実施）。釘本久春に関しては、戦前・戦後の日本語教育への関与について釘本が残した資料を調査するとともに、ハワイでの日系人向け日本語教育への応用（教科書編纂）の実態について調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1940-1950年代の日本語の言語政策は、現代の国語施策・日本語研究の直接的な土台となっている。すでに過去のことであるという捉え方はされていなかったため、当時のことを日本語研究史や言語政策史の対象として捉えられることは稀であった。しかしながら、当時の事情を知る関係者が高齢化していく中で、正確な情報を知る機会は次第に減少してきている。本研究では、1940-1950年代の日本語の言語政策に関与した人物が残した資料を発掘・調査し、当時のことを記憶する人から話を聴取した。消失の危機に瀕した「情報」を記録することは、日本語研究史や言語政策史の基礎資料整備という観点で重要な意義を持っていると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted research on Hisaharu Kugimoto and Etsutaro Iwabuchi, who played an important role in Japanese language policy during the 1940s and 1950s. The research was based on the materials they left behind and interviews with the people involved. Regarding Etsutaro Iwabuchi, we conducted research on the process of compiling national grammar textbooks after the war. We also searched for former subjects of the language survey conducted in Shirakawa City, Fukushima Prefecture, in 1949, which Iwabuchi led. Regarding Hisaharu Kugimoto, we investigated his involvement in prewar and postwar Japanese language education by examining the materials he left behind, as well as their application to Japanese language textbooks for the people of Japanese descent in Hawaii.

研究分野：日本語学

キーワード：言語政策 国語施策史 日本語研究史 日本語教育史 国立国語研究所 岩淵悦太郎 釘本久春

1. 研究開始当初の背景

1940-1950年代の日本語の言語政策は、これまでは、時代が近すぎるということもあり、日本語研究史や言語政策史の対象として捉えられることは稀であった。しかしながら、当時の事情を知る関係者が高齢化していく中で、研究の重要度と緊急性が高まっていた。

そうした中で、釘本久春を始めとした、当時の言語政策に関与した人物が残した資料群が存在していることが明らかになり、その資料と関係者の証言とを合わせた調査が可能な環境であることが明らかになってきていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、1940-1950年代の日本語の言語政策（国語施策、国語教育政策、日本語教育政策）の精緻化のために、当時、実質的な役割を果たし、現在の基礎を創った人物（岩淵悦太郎・釘本久春）の残した資料に基づいた研究を行った。

(2) 本研究が、特に明らかにしたかったことは、次のことである。

- ①岩淵・釘本らの有していた学問的バックボーンが、日本語の言語政策にどのように生かされたのか
- ②岩淵・釘本らは、1940年代後半の政策転換期を跨いで、1950年代以降の日本語の言語政策の方向性をどのように修正したのか

3. 研究の方法

(1) 「施策資料に基づく研究」 当該時期の日本語の言語政策に関する資料は、終戦時に破棄された資料が多い。すでに存在が知られている資料もあるが、それは限られたものである。新たに発掘した資料を加えることで、精緻化した研究を行う。

(2) 「関係者の探索」 上記(1)で記したように、当該時期の日本語の言語政策に関する資料は、欠落部分が生じている。したがって、当時を知る関係者を探索する。

(3) 「インタビュー調査」 上記(2)に成功した場合、インタビュー調査を実施することによって政策の当事者とは異なる視点での見方を得ることや、資料の欠落部分の欠落部分を補うことを行う。

4. 研究成果

(1) 調査方法の探求に関する研究活動

◇調査方法に関する研究集会を2回開催した。(2017年度)

- ・第1回 テーマ「インタビュー調査の実際」(2017年7月8日、専修大学神田校舎)
 - 斎藤達哉「日本語の言語政策を記録する—岩淵悦太郎と釘本久春—」
 - 大塚明子「聞きたいことを聞き出すインタビューのコツ」
 - 河路由佳「戦時に関する聞き取り調査での語りの解釈について」
- ・第2回 テーマは「教科書編纂と言語政策」(2018年3月24日、専修大学神田校舎)
 - 斎藤達哉「岩淵悦太郎と『中等文法』編纂」
 - 河路由佳「釘本久春研究の新たな視点」
 - シンポジウム「教科書編纂と言語政策」(基調報告・川上尚恵)

科学研究費補助金 基盤研究 (C)
「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査」
第1回研究会

インタビュー調査の実際

■プログラム1 ■ プロジェクトの概要と調査計画 (14:00~14:25)
日本語の言語政策を記録する —岩淵悦太郎と釘本久春—
斎藤達哉 (専修大学教授)

■プログラム2 ■ 資料展覧 (14:25~14:45)
岩淵悦太郎と文法教科書

■プログラム3 ■ 雑誌インタビューの現場から (15:00~16:00)
聞きたいことを聞き出すインタビューのコツ
大塚明子 (雑誌広告ディレクター・ライター、専修大学大学院)

■プログラム4 ■ 日本語教育史研究の現場から (16:15~17:15)
戦時に関する聞き取り調査での語りの解釈について
河路由佳 (日本語教育学研究者、専修大学兼任講師)

2017年7月8日(土) 14:00~17:30
専修大学 神田校舎 1号館 209教室
〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8

参加希望の方は6月30日までに、E-mailでお申し込みください。
申し込み先: sh6799@acc.seishu-u.ac.jp (文学部・斎藤達哉)

本研究集会は、JSPS 科学研究費 17002789 「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査」(研究代表者 斎藤達哉) の助成を受けましたものです。





科学研究費補助金 基盤研究 (C)
「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査」
第2回研究会

教科書編纂と言語政策

■報告1 ■ (14:30~15:00)
岩淵悦太郎と『中等文法』編纂
斎藤達哉 (専修大学 教授)

■報告2 ■ (15:00~15:45)
釘本久春研究の新たな視点
河路由佳 (専修大学 兼任講師)

■情報交換会 ■ (16:00~17:00)
教科書編纂と言語政策 —岩淵悦太郎・釘本久春をめぐって—
基調報告 : 川上尚恵 (神戸大学 専任講師)
コーディネーター : 河路由佳

2018年3月24日(土) 14:30~17:00
専修大学 神田校舎 1号館4階 ゼミ46教室
〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8

参加希望の方は3月20日までに、E-mailでお申し込みください。
申し込み先: sh6799@acc.seishu-u.ac.jp (文学部・斎藤達哉)

本研究集会は、JSPS 科学研究費 17002789 「1940-1950年代の日本語政策史研究の精緻化に関する緊急調査」(研究代表者 斎藤達哉) の助成を受けましたものです。





(2) 岩淵悦太郎に関する研究

◇論文執筆：岩淵の戦後文法教科書編纂に関する論文を公表した。(2017年度)

・斎藤達哉『『中等文法』のその後』、『専修国文』第102号、pp.1-22、専修大学日本語

日本文学文化学会 2018年2月20日

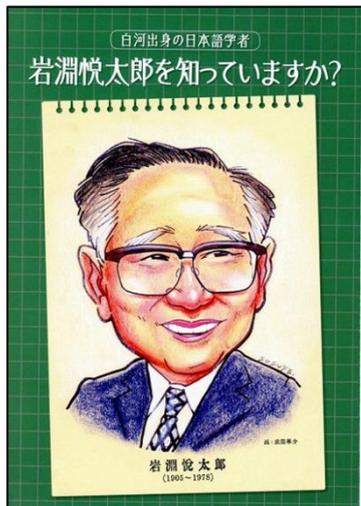
(概要) 岩淵の学問的バックボーンが、日本語の言語政策にどのように活かされたのかを明らかにするために、『中等文法』に関する記録や関連資料を整理した。その結果、従来指摘されてこなかったこととして、新たに次のことを指摘した。

- ① 岩淵は、『中等文法』の編纂を命じられる以前に、論文「明治初期に於ける文法書編纂に就いて」(1941)を発表している。岩淵は、近代以降の文法書・文法教科書の変遷を熟知しており、理想とする文法教育の姿を思い描くことが可能な状況にあった。
- ② 岩淵悦太郎は、『中等文法』の直前に執筆した『師範国語要説』(1942)の中に「文節」を取り入れており、このとき既に、橋本進吉の「文節」を文法教育に取り入れる試みを行っていた。
- ③ 『中等文法』が、文の構造や文書法について不完全であるのは、戦後版『中等文法』への改訂よりも前に橋本進吉を失ったことが大きな原因である。戦後版以降で岩淵悦太郎が、文の構造や文章論の増補を行わなかったのは、師説以外のことを書き加えることを躊躇したからではないだろうか。その結果、改訂への協力者・共著者の関与が大きくなったと思われる。

岩淵は、従来の文法教育への反省を踏まえ、理想とする文法教育の実現を橋本の「文節」に託したと見ることができる。このことによって、形式的な学校文法が普及し、初心者に学習しやすさをもたらした。

◇岩淵の主導した福島県白河市の言語調査の元被験者探索を実施した。(2018~2019年度)

(a) 同調査の元被験者を探すために、白河市民向けに岩淵を紹介するパンフレット「岩淵悦太郎を知っていますか?—白河市民向けの日本語学者—」を作成し、白河市立図書館の協力を得て配布した。(2018年度)



- (b) 白河市立図書館で第1回講演会を開催した。
(2019年度)
- 第1回 テーマ「岩淵悦太郎と国立国語研究所の白河言語調査」(2019年9月29日、白河市立図書館)
 - 齋藤達哉「白河生まれの日本語学者・岩淵悦太郎」
 - 阿部貴人「国立国語研究所の白河市言語調査」

◇複数の元被験者と接触した(2019年度)

- パンフレット配付、第1回講演会の開催等の活動の結果、複数の元被験者と接触することができた。
- 本格的なインタビュー調査を2020年度に計画した。しかし、元被験者は高齢者ばかりであったため、COVID-19の影響を受けて自粛せざるを得なかった。

◇直接の成果ではない波及効果(2021年度)

- 本研究の過程で、研究代表者が整理を行った1949年の白河市言語調査の記録写真群が、白河市の写真アーカイブに収められた。また、白河市とフランス・コンピエーニュ市で同時開催された国際交流事業において展示された(実施期間: フランス2022年1月25日~3月26日、白河市2022年1月31日~3月18日)。

講演会
岩淵悦太郎と
国立国語研究所の**白河言語調査**

日時 2019年9月29日(日)
午後1:30~3:00 (開場午後1時)

会場 白河市立図書館 りぶらん
地域交流会議室(多目的ホール)

定員 200名(入場無料) ※事前申し込みは不要です。

- 1 [講演] 白河生まれの日本語学者・岩淵悦太郎
齋藤 達哉(専修大学教授)
元文化庁専門職 言語調査部
元国立国語研究所主任研究員
- 2 [講演] 国立国語研究所の白河市言語調査
阿部 貴人(専修大学准教授)
国語学研究所長兼客員教授
元国立国語研究所プロジェクト研究員
- 3 [学生企画] 岩淵悦太郎と白河のことば
岩淵悦太郎の調査中における白河の言葉に関する記録や、昭和24年の調査と現在の白河の言葉との比較など、専修大学日本語学科の学生たちによるレポートを行います。

主催: 専修大学文学部日本語学科
後援: 白河市、白河市教育委員会、国立国語研究所
問合せ先: th0799@isc.senshu.ac.jp (専修大学国語学研究所)



https://www.clair.or.jp/flash/20220309.html

トップ > 情報ライブラリ > 海外事務所フラッシュ > バックナンバー一覧 > クレア海外事務所フラッシュ (2022年3月9日配信)

海外事務所フラッシュ

2022年3月9日配信

【クレア海外事務所フラッシュ】 ●コンピエーニュ市・白河市で写真展同時開催

◇コンピエーニュ市・白河市で写真展同時開催

姉妹都市である仏コンピエーニュ市と福島県白河市が、「コンピエーニュと白河『時の鏡』1935年~1955年」と題して写真展を同時開催している。

コンピエーニュの写真展では、1935年から20年間に2都市で撮影された写真について、撮影時期と被写体のテーマが類似するものを各都市から1枚ずつ、2枚1組で一つの額に入れて展示している。そのため来場者は、まさに「時の鏡」のように2都市の歴史に思いをはせることができる。

展示された写真からは、コロナ禍にあっても両市がこれからも密接に交流を続けていきたいという熱い思いが伝わってくるようである。詳しくは [こちら](#)。

写真: コンピエーニュにおける写真展の様子



一般財団法人自治体国際化協会(クレア)の紹介記事
(<https://www.clair.or.jp/j/flash/20220309.html>)

◇岩淵の主導した福島県白河市の言語調査の元被験者の「再探索」を実施した。(2022年度)

- 接触を行っていた元被験者の中には、COVID-19の影響による調査自粛期間(2020~2021年度)を経る間に、インタビュー調査を受けていただけない状況になられた方も発生した。インタビュー調査の対象者を新たに探すために、第2回講演会・シンポジウムを開催した。
- テーマ 「白河から始まる日本語研究」(2023年3月11日、白河市図書館)
 - 丸山岳彦「岩淵悦太郎の話す白河方言を聴こう」
 - 齋藤達哉「岩淵悦太郎収集の貴重古典籍」
 - シンポジウム「白河方言の魅力」

白河から始まる日本語研究

令和5(2023)年3月11日(土) 13:30~16:00

会場 白河市立図書館~りぶらん~ 多目的ホール 入場料 無料

講演1	「岩淵悦太郎の話す白河方言を聴こう」 丸山岳彦(専修大学国際コミュニケーション学部教授) ※岩淵の肉声を聞きながら、白河方言を紹介します。	13:35~14:35
講演2	「岩淵悦太郎収集の貴重古典籍」 齋藤達哉(専修大学国際コミュニケーション学部教授) ※展示している資料の見どころを解説します。	14:35~15:05
シンポジウム	「白河方言の魅力」 ※パネラーたちが白河方言の魅力を語ります。	15:15~16:00

申込方法 右のQRコードを読み取り、専用のフォームからか、
電話で白河市立図書館(0248-23-3250)にお申し込みください。



- ・前回とほぼ同数の元被験者と接触することができた。しかしながら、2022年度内のインタビュー調査はできなかった。本研究期間終了後になるが、インタビュー調査を実施し、成果公表する予定である。

(3) 釘本久春に関する研究

1945年以前の釘本は文部官僚として、いわゆる大東亜共栄圏における日本語教育に関与していた。1940年代後半の政策転換期を跨いで、1950年代以降の日本語の言語政策の方向性をどのように修正したのかを調査した。

(a) ハワイでの調査 (2018年度)

1960年代前半、釘本はハワイ在住の日系人団体である「ハワイ教育会」から、日系人小学生向けの日本語教科書の改訂・編纂を依頼された。この経緯を記した資料を探索するために、ハワイでの現地調査を2019年3月に実施した。現地では、次の調査を実施した。

- ① ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館等でのハワイ教育会の運営議事録の調査
- ② ハワイ教育会の元日本語教師 (80歳代) へのインタビュー調査
- ③ 日本語教育を受けた経験のある日系3世 (70歳代) へのインタビュー調査

(b) 論文執筆：ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館等での資料調査、及び、ハワイ教育会の元日本語教師 (80歳代) へのインタビューに基づき、論文執筆を行った。(2019年度)

- ・ 斎藤達哉・王伸子・高田智和「ハワイ教育会『にっぽんごのほん』の編纂事情—国語教育と日本語教育とのほごま—」『専修国文』105号、pp. 1-41、専修大学日本語日本文学文化学会、2019年9月24日

(概要) ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館等での資料調査 (2019年3月) に基づき、ハワイ教育会の戦後第2期日本語教科書について、企画から完成までの経緯、書誌、現存状況、内容上の特徴、使用状況、その後の戦後第3期日本語教科書での改訂点について述べた。

釘本による戦後第2期日本語教科書は、あくまで戦前型の国語教科書の延長上にあり、日本語を外国語として教えるには不十分であったと評価せざるを得ない。

ただし、この評価は釘本の編纂方針だけが負うものではない。戦後、ハワイの日系人の生徒達が英語を第1言語としていく中で、ハワイ教育会自体が、日本語の言語教育を国語教育から日本語教育へ方向転換させようとしても、教科書や教授法について国語教育に拠ろうとしていたからである。『布哇教育会記録簿』の中の編纂時のやり取りを見ると、国語教科書型の釘本教科書に対して、ハワイ教育会側は複数の修正要求を行っていたものの、最終的に「使用する」と判断したことがわかる。当時のハワイ教育会でも、母語としての日本語学習から外国語としての日本語学習へ切り替える際に何が必要とされるのかについての明確な答えを持ち合わせていなかったのである。

ハワイ教育会の戦後第2期日本語教科書に関する釘本久春とハワイ教育会とのやり取りは、日本語の母語話者である教師たちが、生徒側に生じた母語の変化の速度に対応するのはいかに困難なことであったかを示す事例の一つと解釈できよう。

(c) 日系3世 (70歳代) へのインタビューに基づき、論文執筆を行った。(2021年度)

- ・ 斎藤達哉・王伸子「釘本久春とハワイの日本語—1965年における日系人社会の日本語—」『専修国文』109号、pp. 1-23、専修大学日本語日本文学文化学会、2021年9月30日

(概要) 釘本がハワイ教育会から日本語教科書の執筆を依頼された1965年当時の「ハワイにおける日系人社会の日本語環境」について、日系3世へのインタビューを行いながら整理した内容を報告した。具体的には、次の二つのことについて調べた。

I. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容は何だったのか (渡航目的)

II. ハワイ日系人社会の新聞表記はどのようなものだったのか (日本語環境)

日系3世の協力者は、ハワイ大学で釘本の授業を受けた経験を有し、その後も釘本家と家族ぐるみで親交があった。同協力者が家庭以外で日本語に触れたのは、小学校の頃で、ホノルルで町田時保氏が教えていた和敬学園においてであった。

インタビュー調査の録音と資料との照合から、「I. 釘本がハワイ大学で担当した科目内容は何だったのか」については、語学としての日本語の教授を中心とし、併せて、日本文学や日本文化についても講じた形跡があることが分かった。また、日本語教科書は、『日本語読本』(1957年、国際学友会)が使用された可能性が高いこともわかった。「II. ハワイ日系人社会の新聞表記はどのようなものだったのか」については、『布哇タイムス』の場合、1965年の時点では、旧漢字と「現代仮名づかい」(1946年、内閣告示)に近い仮名遣いとを組み合わせており、釘本もこれを承知した上で、日本語教科書の改訂に携わっていたことがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 齋藤達哉・王伸子	4. 巻 109
2. 論文標題 釘本久春とハワイの日本語 1965年における日系人社会の日本語環境	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『専修国文』	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤達哉・王伸子・高田智和	4. 巻 105
2. 論文標題 ハワイ教育会『にっぽんごのほん』の編纂事情 国語教育と日本語教育とのはざま	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『専修国文』	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤達哉	4. 巻 102
2. 論文標題 『中等文法』のその後	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『専修国文』	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------